

会談座

社会体験と学生の成長

—フィールドに赴く学生たち—

出席者（発言順）

岡本博公（大学商学部教授）

山上 徹（女子大学現代社会学部教授）

三木光範（大学工学部教授）

山田礼子（大学文学部教授）

田中 謙（大学院院商学研究科教授）

司会 本誌編集委員

司会 ●この座談会では、大学と社会・産業・地域とのつながりのうち、学生のインターンシップ教育や企業、公的機関などと共同で行なっている学生の活動の現状を、近くで見られる先生方から紹介していただき、あわせてそれらが学生の成長にとって持つ意味や、これから大学が取り組むべき課題などを、語っていただきますと思います。最初は大学コンソーシアム京都のビジネスインターンシップ・コースで、総合コーディネータとして関わっておられる岡本先生からお願います。大学コンソーシアム京都のインターンシップへの取り組みは、全国的に見ても早かったとお聞きしています。

インターンシップのはじまり

岡本 ●まず、インターンシップ教育の始まりからお話ししましょう。同志社大学も参加している「大学コンソーシアム京都」のインターンシッププログラムは、キャリア形成ということではなく、教育プログラムとして位置づけられています。京都の大学連合体が経験をつもうという目的で始めたプログラムでしたが、規模としても相当に大規模なものでしたし、おそらく今でも全国で最も進んでいるインターンシッププログラムの一つだと思います。

インターンシップを最初にやり出した

成が、産業界や地域との連携なくしては、ほとんどできなくなっているということをよく認識している。だから私たちは、インターンシップの意義や企業にとってのメリットをあれこれ論じる前に、企業や行政もまず社会貢献の活動の一環として学生を受け入れてくださいと要求したんです。

もちろん企業が負担するコスト、学生への報酬、事故等のリスクなどの問題についてもぜひ議論しましたが、最終的には、これは大学が責任をもって行う教育プログラムであり、産業界や行政にとっても社会貢献であるということ得意できました。そして1998年からスタートし、以来7年間やってきて、現在ではだいたい毎年5、6百人規模で進める大規模プロジェクトになっています。

司会 ●具体的に内容を教えてください。

変わる面白さ、楽しさ

岡本 ●教育プログラムですから、ていねいな事前学習、事後学習が必要になるのは当然です。事前学習としては、4月に20人程度の小さなクラスを作り、デイス



インターンシップに励む学生（大学コンソーシアム京都実施）

カッションを3回行って、インターンシップで何をやるか、業界の調査と自らの課題設定の作業をします。もちろんビジネススマナーですが、パソコン研修等の事前のトレーニングも行います。その上で、夏休みに2週間から1カ月、主として京都に事業所のある会社、行政団体、NPOなどで就業体験をさせる。そして

のは私たちというわけではなく、すでにいくつかの大学では行われていました。1997年に通産、労働、文部のいわゆる三省合意があり、産官学連携で人材を育成しようとして、その一つの重要な方策としてインターンシップを推進しようという動きがあったんです。通産省が名古屋大学、愛知県、トヨタ自動車などをコアにしたインターンシップを始めたんですが、「大学コンソーシアム京都」としてはそれを受けて、教育活動の一環としてインターンシップをどのように考えるか、ぜひ研究しました。

その研究会の中で率直に話をさせていたいただいたのは、私たちは21世紀の人材育成に、やはりクラス単位で2回デイスカッションを行って、事後レポートを作成させ、それでようやく修了書を与えます。

大学コンソーシアム京都としては当初、3年間試行錯誤しながら経験を蓄積して、それから各大学へ普及の努力をしようという方針でした。それが3年後にはもう各大学が独自に並行して動き始めていて、同志社大学でもキャリアセンター（旧就職部）を中心にインターンシップを推進していますね。

私が最近のキャッチフレーズにしているのは、学生が「変わる面白さ、変える楽しさ」ということです。働くことの意味、社会の仕組み、厳しさ、人間関係の大切さ、基本的ルールの意味。学生たちはいろんなことを学んでいきますので、自分が変わる面白さがある。そして比較的短期なので、変わる自分を見える貴重な機会である。同時に企業や行政などに対して、インターンシップ生だからこそできる素朴な発言や提言があります。それでもし何かを変えることができたら、これも楽しい。「変わる面白さ、変



岡本博公氏

おかもと・ひろきみ／1947年生まれ。1976年京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。専門は企業システム。現在の研究課題は生産・販売システムの研究。日本経営学会理事（1999～2004）のほか経営史学会、産業学会、アジア経営学会（常任理事）等に所属。2004年度から大学商学部長。1998年から大学コンソーシアム京都のインターンシップ総合コーディネーターを務める。主な著書に、『現代鉄鋼企業の類型分析』（ミネルヴァ書房、1984年）、『現代企業の生・販統合』（新評論、1995年）など。

える楽しさ」。そういうふうに表示しながら学生の士気を高めています。
司会 ●これは2回生、3回生が対象ですか。

岡本 ●ビジネスコースは2、3回生。同志大学のキャリアセンターのインターンシップは3回生。NPOや行政のコースでは4回生も含みますし、大学院生もやっています。

司会 ●女子大でも多様な取り組みがあるようですね。

お茶摘み体験から女将体験まで

山上 ●私は女子大学の現代社会学部で京都学・観光学コースを担当しています。また、観光ホスピタリティ研究会の指導

も行っています。

今年で4回目になりますが、宇治茶を作っている和束町で、学生が茶娘の格好をしてお茶摘みを体験しました。観光学の視点から和束町の活性化を考えてもらおうということ。これは主に1回生と3回生の基礎・応用ゼミ生を対象にした活動です。

もう一つは城崎温泉でホスピタリティ体験学習というのを過去4年間行っています。これは2年前からインターンシップとして単位が認められています。事前・事後学習を行いながら問題意識を高め、約30名の学生が3、4名ずつ旅館に分宿し、計6泊7日で研修を行うのです。
司会 ●旅館でどんなことが学ぶのです



和束町茶摘み体験

うか。

山上 ●相手を思いやるホスピタリティ精神、相手をもてなすという心・精神を体験によって探し出すことですね。特に配膳などの労働が中心で、またお客様に対する立ち居振る舞いも学びます。今まで相手を思いやるということが少なかった学生たちにとって、この体験学習はホスピタリティ精神を培う良い機会になっています。一方、城崎温泉側では学生たちが浴衣姿で外湯に行くだけでも温泉街が華やいで、地域の活性化につながっているといわれます。特にそれを取材するマスコミの出入りもあり、地域活性化の条件と要因を与える機会ともなります。何よりも学生たち自身が体験学習に非常に

興味を示していますね。

この他、昨年は同志社大学のサークルと地元の「舞妓の茶本舗」がタイアップして、観光ホスピタリティ研究会も加わってお茶の館のデザインを考案したようです。これは相当利益があつて、その収入で地域・大学へ何が貢献できるかを議論したんですね。そしたら灯りの少ない京田辺キャンパスにソーラーの電灯をつけようと学生が企画しています。得た利益を地域、学生に還元しようということですね。

さらに、今年の12月には京都商工会議所が京都・観光文化検定試験を行うんですが、この検定試験にゼミ生を中心に大勢の学生たちを挑戦させることも考えて

います。京都の文化の勉強にもなりますので、夏休み中にゼミを中心として、京都市内でフィールドワークを行いました。

司会 ●観光ホスピタリティ研究会というのは、学生のサークルみたいなものですか。

山上 ●いえ、現代社会学部社会学会に於ける正規の研究会です。他のプロジェクトであるホスピタリティ体験学習は、現代社会学部のインターンシップ科目です。その単位の認定は、体験する旅館の女将さんなどの評価を参考にし、教員が行います。

司会 ●ありがとうございます。工学部の取り組みはどうでしょうか。

三木光範氏

みき・みつりのり／1950年兵庫県生まれ。大阪市立大学大学院工学研究科博士課程修了。専門は設計・システム工学、現在の研究課題は分散知識処理に基づくシステム最適化、並列処理および問題向き並列アルゴリズム、知的人工物設計。著書に『工学問題を解決する適応化・知能化・最適化法』（技法堂出版、1996年）、『進化する人工物』（オーム社、1999年）など。超並列計算研究会代表や産業構造審議会委員などを務める。





山上 徹氏

やまじょう・とおる／1943年生まれ。1973年日本大学大学院商学研究科博士課程修了。専門は観光・ホスピタリティ、現在の研究課題は京都の観光問題。日本国際観光学会理事、日本ホスピタリティ・マネジメント学会理事、日本港湾経済学会会長、日本貿易学会理事、等多くの役職を務める。2001年から大学コンソーシアム京都の学術コンソーシアム研究委員。主な著書・論文に『ホスピタリティ・観光産業論』（白桃書房、1999年）、『観光の京都論』（学文社、2002年）、『現代港湾の異文化の賑わい』（成山堂書店、2003年）、『港湾都市の活性化と港湾観光』（『都市政策』111号、2003年）ほか多数。

社会性と文化的刺激を

三木 ●私は昨年、学生とNPOを立ち上げたのですが、まず、そのモチベーションからお話しさせてください。私は1994年に同志社に赴任したんですが、そこで感じたことは同志社の学生は非常に優秀なんですけれども、問題もある。とくに工学部の学生は社会性に欠けている。学会で他大学や国際会議に行った時、たとえば東大、京大、早慶の学生たちと同志社の学生と一緒に話をすると、どうも同志社の学生はおとなしくて、会話の主導権が取れない。学力や潜在能力はあるのにリーダーシップがとれない。要は社会性がないんです。

すでに研究室や開発現場に閉じこもって研究していればいいという時代は終わって、最近では消費者と設計者がコラボレートしながら新商品を作っていくことが重要になっていっていますから、工学部の学生もそういう社会性というものを抜きにして、良いエンジニアにはなれないと思うんです。そういうことを常々感じていましたので、何とかしてあげようというモチベーションがあったわけです。

学生とたちあげたNPO

もう一つはやはり、京田辺キャンパスに学生のモチベーションを高めるような刺激が少ないことですね。よく学生に言うんですが、日曜日にボーイフレンドやガールフレンドと下宿にこもって、レン

タルビデオ借りて一日過ごす学生生活なんて最悪ですよ、と。社会的にもう全然目覚めていない。ところが現実には、そういう生活を送る学生は結構いるわけです。遠方から通っている学生でも通学に4、5時間かかりサークル活動もできない。都心にキャンパスがあつて文化の息吹にふれられる環境ではないんです。

て、学生が自分たちでも地域貢献ができるんだということがわかれば、少しは奮奮するんじゃないかと考えました。そして学生たちと始めたのが、NPO「京都Citog.ac」です。

司会 ●これはどんな意味ですか。

三木 ●CitogというのはCitizen、GはGovernment。「Citog」は市民から政府・行政にという意味です。これは積極的に学生と地域とのコラボレーションを進めようというもので、具体的には同志社京田辺キャンパスに学ぶ工学部や他学部の学生も含めて、この京田辺周辺の各自治体とタイアップして、同志社の学生が持っている比較的専門的な知識を活かした貢献ができるんじゃないかとい

うことです。

たとえば情報系の学生だったら、コンピュータシステムの知識やスキルを活かして地方公共団体が提供する市民サービスの高度化ができないかと考え、城陽市役所とタイアップして、10名ぐらいの学生と一緒に「城陽市IT高度化プロジェクト」を立ち上げました。市役所の中にITをどれだけ持ち込めるかということ、ビジネスのこととか小学校の問題など、いろんな提案をしてみました。私たちの提案で最も中身があつて相手にもほめていただいたのは介護の分野ですね。いまヘルパーの問題として、介護の必要な人とヘルパーとのマッチングがうまくいかないという問題があります。そこで

携帯電話を使い、タクシーの配車システムのようにリアルタイムでヘルパーのサインメントを行うシステムを提案したんです。

これがきっかけで城陽市役所とは非常に付き合いが長くなりまして、最近ではシステム開発、市役所のコンピュータシステムの改良など、いろんなことに関わっています。その活動が本格的になってきたので、2003年10月に学生たちをたきつけてNPO化をすることになりました。NPOとは何ぞやという勉強に始まって、学生自身が一生懸命勉強してNPOの定款も作り、公証人役場にも出かけ、京都府庁とも折衝しました。

学生を中心とするNPOが社会、とく



山田礼子氏

やまだ・れいこ／1956年兵庫県生まれ。同志社大学文学部卒業後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校教育学大学院でPh.D.取得。専攻は教育社会学、比較教育学。大学教育開発センター副所長。主な著書・論文として、『社会人大学院で何を学ぶか』（岩波アクティブ新書、2002年）、『プロフェッショナルスクール—アメリカの専門職養成—』（玉川大学出版部、1998年）、『「伝統的ジェンダー観」の神話を超えて—アメリカ駐在員夫人の意識変容』（東信堂、2004年）ほか多数。



田中 謙氏

たなか・ゆずる／1934年京都府生まれ。1957年同志社大学法学部卒業。専門は事業創造と経営、研究分野は事業創造と経営管理の理論的実証的分析。京都銀行常務取締役のほか、京都カードサービス株式会社取締役社長、京都総合研究所理事・取締役、関西文化学術研究センター株式会社取締役他の要職を歴任。主な著書・論文に、『総論ベンチャービジネス』（金融財政事情研究会、2003年）、『ベンチャービジネスのファイナンス』（金融財政事情研究会、1997年）、『経営特性を發揮出来る人間づくりー同質化の中の異質化を支えるもの』（金融人事問題研究会、1972年）、『リーテールバンキング革命ー国際的展望』（共訳、金融財政事情研究会、1983年）、ほか。

学生の専門知識を活かして

に地方公共団体と関わっていくメリットとしては、学生が自分たちの力を発見して生き生きと変わっていくことことや、同志社大学が地域貢献にもアピールできるということもあります。しかし一番大きなメリットは、専門知識を持った学生たちが住民や市役所のニーズを聞き、意義深い仕事ができることだと思います。いま行政は、NPOの力なくしては何もできない状況になっているわけですね。そういう中で、まだまだNPOが入り込んでいない分野がたくさんあるんです。とくにIT関係などはその顕著な例ですね。

司会●具体的に学生にはどんなことができるんでしょうか。

ニュアールを作っていくというわけですね。マニユアルですから、学生の作った比較的簡素なものでも、要はわかればいいんです。学生たちが自分のレベルに応じて考えればいい。しかも実際に買うと100万円くらいするようなビデオマニュアルが、我々だったら10万、20万で作れる。工夫すれば、いくらでも学生が貢献できることがあるんじゃないでしょうか。

司会●そのNPOに参加している学生の人数はどれくらいですか。

三木●現在は30名くらいですね。講習会班は会場の確保からテキストの作成、講師のトレーニングなどを担当します。他にもシステム班、サーバー班、調査・検討班など、いくつかのグループに分かれてやっています。学年でいえば今は修士1年、それから4年生から1年生まで。同女の方にも7、8人入っていました。だいぶ盛り上がりつつあります。

田中●私は中小企業の経営やファイナンスを中心に、ベンチャーについて教えています。その関係でリエゾンオフィスの活動に対して、当初からベンチャーとい

三木●具体的な活動としては今年、城陽市にある400台のコンピュータ・ネットワークシステムの改良を行って、非常に喜ばれましたが、たとえば市役所がIT化したという時に、市役所内に仕様をまとめられる人が少なく、またそれらの人達も日常業務で忙しい。すると大手IT企業に丸投げしてしまう。企業は小さな市町村にまでカスタマイズ化していたら儲かりませんから、結局はどこかの市町村で作ったシステムをまた丸投げで売る。使にくいシステムを高い値段で売ることがあるかもしれません。学生たちのNPOなら専門知識が生かせます

う視点でご協力をしてまいりました。各種の講演会とか、今行っていますのは自主経営ゼミナールです。リエゾンオフィスがバックアップしてなんですが、参加者は30名から40名くらい。毎週5時半から9時頃まで。皆さん熱心に集まっています。もちろんいわゆる座学になったらいけないので、外に見にいったりもしています。その中に、自分で起業したりセミナーを企画したりして、社会的な活動を行っている学生も来ていますね。

司会●学生が社会参加、社会体験する中で、学生自身にどんな変化が見られますか。

学生は気づいてこそ、進化する

岡本●インターンシップは学生のやることですから、まあ、おかしな話はいっぱいありますよ。ホテルの実習に短パンで行って追い返されて、トラブルになったとか(笑)。

インターンシップでは「いつ、どこで気づくか」ということが非常に大きなポイントです。これを発見できた学生は最

し、しかも我々はそれらの企業と対等に話ができます。非常に存在価値があるんじゃないかと思っています。

もともと知識工学科からスタートしたので今はITですが、今後は次のターゲットを考えています。たとえば、京田辺市ではお年寄りや主婦のためのIT講習をすることになりましたし、あと電子マニュアルの作成を考えています。人事異動の多い市役所で異動先の業務を自学自習できるよう、コンピュータの中にマニュアルを入れていくということですね。工学部の学生がコアの部分のアイデアを出すと、今度は同志社女子大学の情報メディア学科の学生さん、あるいは他学部ノウハウを入れながら、地域のマ

後にはすごく良くなるんです。たとえば、私は7年間ずっとホテルクルアスを持っていますが、ホテルは学生にとって、とくに女子学生を中心に憧れの職業なんです。でもたとえばフロントはホテルにとっていわば顔だから、そんな簡単にインターンシップ生を立てるわけにはいきません。どうしても、料飲方面のサービスなどが多くなる。すると「アルバイトと一緒に」という状態、ほとんど紙一重になる可能性があるんです。大切なのは、これはアルバイトと同じなのか、いや本当はアルバイトじゃないんだということを、どこの段階で知るかです。

昨年よりゾート系ホテルでプールの監視の実習がありました。その中で、暑いのに自分は何をしているんだ、しかもアルバイトならちゃんと給料がもらえるけれど、インターンシップ生だから一銭も入らない、くそって(笑)。でも、その中で、これはホテル全体の一つの仕組みであつて安全性、もてなし、ホスピタリティなど、どれ一つ欠けてもだめなんだというところが発見できた子は、今度はぐん

ぐんいろいろなものを吸収できるような
るんですね。ですからインターンシップ
や体験型学習では、どこかで何かを気づ
かせる、発見させるというプロセスをう
まく仕組むことがすごく重要なんです。
田中●知識と体験知についてですが、や
はり知識というのは人間の把握で少し、
あるいは信念ですね。そこから学生がど
う示唆を受けるか。いま岡本先生が言わ
れたことも、どういうインプティケーショ
ン（示唆）を受けるかというのは、その
中に考え方とか思想とかが入ってくるも
のだと思います。やはり人間として、
個々人の情報や知識の受けとめ方、思想、
哲学が大切ですね。

体験型の重要性について、認識してい
ても何らかのアクションを起こさない
と、現実のものとなりません。一つ事例
を申しますと、先日ドイツのSAPとい
うソフト会社が主催する会合に学生を連
れていきました。2日間で約200のセ
ミナーがあり、その他の展示会場ではお
そらく5千人や6千人、多くの人が参加
していました。そういった中で、学生は
技術的な話はほとんど分かっているとい

思うんですが、世の中というのはこんな
動きで、こんなに多くの人たちが動いて
るんだなということには気づいたと思
います。これは大きかったなと思います。
それからもう一つは、私が行っている
自主経営ゼミでは毎回冒頭、全員に2分
間ずつスピーチさせます。そうすると、
自己表現力、プレゼンテーション能力な
どの向上だけでなく、自分でものを考え
る練習になり、行動がアクティブにな
りますね。行動が一步前に出て、思考的
にも一步前へ出る。これを去年から毎回や
っている、面白いことに学生が進化し
てくるんですね。次は何を言おうか、そ
してこれをどう捉えたらいいか。学生は
変わってきてます。やってよかつたと思
っています。

現場・現物・現象で実践

山上●同女のホスピタリティ体験学習に
ついていうと、肉体的な体験のみがすべ
てとは私は考えていません。今の学生は、
社会システムの全体像が見えていないと
いう意味で、大学の講義に對しかなり消
化不良を起こしているんです。よく旅館

の女将さんなどがおっしゃるには、「命
令待ち」の学生が多いと。そういう中で
社会的な体験学習をすることは、社会シ
ステムについても非常に興味を抱くよう
になって、積極的にその後の研究活動に
も入っていきけるという、一つの動機づけ
になっているんですね。研修の終わり頃
になるとかなり自主的にどんどん行動す
るようになって、非常に元気になるとい
うことも大きいです。掃除、布団の上げ
下ろしからスリッパの置き方一つまで、
やり方一つにしても一つのシステムとし
てちゃんとした原則がありますので、そ
ういったことを知ってハッとするといい
んです。

ですから私の考え方は、社会システム
の見えないものを見えるようにするた
め、まず問題意識を高めるといことで、
現場、現物、現象の三現主義という立場
でホスピタリティを実践しようと呼びか
けています。卒論研究においては、原理、
原則、原因を突き止める三つの原、三原
主義を加えるように指導しております。
こういう両面から教育・指導をしたいな
ということを私の体験学習指導の基本に

しております。

岡本●これも去年、あるホテルでこんな
ことがありました。ホテルの総務部長と
人事担当者がインターンシップ生に「君
たち、気づいたことがあったら言ってご
らん」と尋ねられたんですね。そしたら
「このホテル、ムカデが出ますね」と学

生が言った（笑）。そしたらホテル側は
すかさず「それは知っています。で、あ
なたならそれをどうしますか」と逆に尋
ねられた。

司会●なるほど。

岡本●ムカデが出るからといってゴキ
リホイホイをホテルのいろんなところに
置くわけにはいきませんからね。そうす
るとその学生は、自分の気づいたことを
社会で発言するためには、そのまま言う
だけではだめなんだ。何か提案や提言を
しないといけないんだと、ハッと気づく
わけでしょう。この経験を体験できた学
生とできない学生とでは、すごく違っ
てきます。

インターンシップによって学生を成長
させるためには、このような何かを発見
できるようなプロセスを、事前にできる
だけ多くの仮説という形で作らせて、何
の経験でも勉強になるんだという装置を
たくさん仕掛けてやらないといけない。
体験型学習はすごく重要なんです。山
上先生がおっしゃった三現主義や三原主
義などを含めて、現場で知ったことを純
化し直して、自分の蓄積にさせなきゃい

けない。ここがものすごく重要だと思
います。
司会●お話を聞いていますと、このよう
な参加型、体験型の教育がいまの学生に
とっては必要になっているということ
ですね。

体験型学習と今日の学生

山田●私は文学部で教育学専攻に所属し
ていますが同時に、学外では、'03年度か
ら始まった「特色ある教育支援プログラ
ム」にも関わっています。その関係から
近年言われる大学教育の変容と学生の変
容との関係について、まずお話ししたい
と思います。

先ほど三木先生がおっしゃったよう
に、やはり今はどの大学でも学生の社会
性の低下に苦しんでいますね。過去の、
たとえば60年代から70年代の学生に社会
性があつたかということを検証するのは
非常に難しいと思いますが、当時は、教
育課程外の教育機能、つまりサークルや
クラブ活動における教育機能がたぶん相
当大きかつたんだろうと思いますね。上
級生と下級生がいて、思想的にも考え方



城崎温泉ホスピタリティ体験実習

も違う人がいて、議論や喧嘩をしてお互いを理解することが社会性を育むことにもなっていたと思うんです。

今日でもサークルはたくさんあるんですよ。ただ、それは一つのグループなんです。同じような趣味や考え方を持つ人たちが作る集団だという点が、昔と比較して大きな違いだと思います。そうなる今のサークルでは、気に入ったことさえ話したり関心を持ったりしていればいいというふうになってしまいがちです。いま若い学生たちに聞くと、まず社会問題とかいろんな政治問題とかを議論することが、ダサイというようなカルチャーになってしまっている。だから、そういう話はしなくなる。

じゃあ、いったいどうすればいいのか。教育課程が一つのポイントですね。教育課程を見た時に、おそらく、かつては知識的な教育という知のあり方があったと思います。現在では体験知が非常に有効になってきています。つまり昔の学生にとっては、学問はやはり本や論文を読むことによって現実に向てはめ、考えていくということであった。また、それを

するだけの時間もあつたんだろうと思います。それが今は、学生は非常に忙しくなっている。じゃあどうするかということ、意外に体験知が大事なんですね。それを大学という一つの装置が、正式の課程として、あるいは課程外として提供する。それに学生が乗ってくるというようなようになってきていると思います。

昨年、「特色ある教育プログラム」に応募してこられた中で、体験学習が非常にたくさんあつたということも、それを示しています。おそらく学生の方も体験で得た経験を知識と、うまくリンクさせることが、現代ではより有効な形になっているからかなという感じがしますね。

学生参加と 社会の受け止め

山田●もう一つ、社会での産学連携にしても、学生参加において、学生に対する評価は意外に低くないんです。かつては社会自体が固定化していましたから、学生の新しい視点というのはそれほど必要ではなかったかもしれない。それが現代では社会の変化するスピードが非常に速

いので、学生たちの体験知のようなものも社会が必要とするようになってきたんです。たとえばゲームの世界なんて、私たちの世代はともついでいけません。ゲームの攻略本みたいなものになると、小学生の時からゲームをしてきて攻略法を覚えていって、それを実際に書くライターがいるわけです。介護でも、学生や若い人たちの視点からの斬新な提案を社会はたぶん必要としている。そういう需要と供給のバランスという視点からも昔とは違う、一つの新しいあり方が生まれつつあるのではないかと思います。

司会●1回生の学生と話していると、彼らとはとにかくアルバイトをやりたがりですね。目的としては遊ぶお金とか生活費とかいろいろありますが、一番強い欲求として社会の現実を知りたいからというケースが結構あるようです。大学生になったんだから本を読めと私は説教するんですけど、学生は本を読まない。というのは、あまりにも社会の現実を知らないということ。彼らにはある意味では自覚しすぎてしまって、それがあつた種のコンプレックスになっている。社会の現実を何

も知らない人間が、経済の本を読んでも分かるはずもないし、現実を知らないのに理論だけを知って頭でっかちになつたらいけないという思いがすごく強いようです。だから体験型学習とか、あるいは現実を見せることによって、ある程度、社会の現実を知れば、逆にそれを本で得られる知識で整理したいという欲求が生まれるのかなとも感じます。

山田●教育学専攻の学生は、他学部の学生とはまたちよつと違うと思います。教育学を出た学生の進路は、一般企業に就職する道もありますが、やはり教員や塾の講師になったり、あるいは不登校の子どもたちの支援みたいなものに入っていくケースが結構あります。そういう時に、ボランティアをしたり、不登校の子どもの支援などをしたりすると、やつぱり変わってくるという点がありますね。

同志社の学生のバックグラウンドを見ると、比較的恵まれた家庭で育つた方が多いですね。苦労していない学生が多い。それで、そのままの視点から人間を把握してしまうと当然限界があるわけですね。ボランティアなどをすると、自分の育つ

た環境とは違う家庭が世の中に非常に多いことを知る。教育困難な子どもたちを教える塾の講師になった時は、自分たちの背景やプロセスとは違うことを体験することによって、他者への共感や異文化への理解を学んでいけると思っていますね。それなどはやはり教育学の学生に求められる資質であつて、本ではわからないことを学ぶのは大切ですし、人間を把握するということの意味では、とりわけ重要な点ではないかなと思います。

学生の背中を押してやる

三木●先ほどお話ししたNPOを立ち上げる過程で私がつくづく感じたのは、学生たちはちゃんとした目標をうまく与えてやると、伸び伸びと、すごい力を発揮するということです。われわれはちょっと背中を押してあげるだけでいい。彼らは自分の中に潜んでいる力をたぶん過小評価していると思うんだけど、もつと素晴らしくて大きいことができるのに行動を「こんなもんだらう」と思い込んでいる。そこを取り除いてやるのが私たちの役割だと思っています。学生たちが講義

にも疲れ、アパートに帰って何もすることがないからレンタルビデオを観ているのは、まさにそういう目標が与えられてないからだと思っています。これを大学の中できちんと与えることが、大学の非常に大きな教育プログラムの一つになっているという気がします。

学生の後押しをする例をいくつか挙げ



「スーパーコンピューティング2003」の展示会場

ますと、2年前ぐらい前から東京でやっている「ビジネスコンテストKIING」。1年生から修士までの大学生100人ぐらいが日本中から集まり、代々木のオリピックスタジアムに1週間泊まり込んで5、6人のグループに分かれ、夜通し議論してビジネスモデルを考えて最後に発表するんです。審査員には企業の方がずらっと並んでおられるんですけど、そういう中でコンテストがある。ここからうちから学生を2、3名出したら、一昨年は行ってただけでも素晴らしいなと思っただけですけど、去年はどうとう1人が参加したグループが最優秀賞をとりました。そのお陰で彼は就職が決まったんですけどね。すごいことなんですよ。同志社大学工学部としては初の経験だし、そんなこともやればできるといことが学生たちにわかったんです。

もう一つ、昨年私たちの研究室で作った「Supernova」というPCクラスタが日本一の計算速度を出しまして、アメリカで開かれた「スーパーコンピューティング2003」という大会で研究展示を行いました。世界中からコンピュータ

カーが来て展示をしたり講演をやったりするんです。そこに我々もブースを借りて展示をして、学生10人ぐらいが英語で参加者の人たちにプレゼンをしました。すると彼らはもう生き生きとして、また来年も行って、自分が外国へ行って、展示会で説明するなんてことを夢にも思わなかった学生が、どんどん変わってくるんです。

それでついに、これは研究室の話ですが、(独)情報処理推進機構(IPA)がやっている「未踏ソフトウェア創造事業」というIT人材発掘・育成プロジェクトに学生が応募して、1千万円の研究費を三つも取ってきたんです。研究室の予算より多いぐらいのお金を学生が、個人で取ってきた(笑)。私もさすがに



「スーパーコンピューティング2003」に参加した学生たち(中央が三木教授)

びつくりして、「研究室にちよつとはお金入れてよ」と言ってたんですが(笑)。

司会●それはすごい。

三木●そうなつてくるともう、学生たちは「なんだ、やればできるやんか」と思うわけです。そういうことを今まで先輩たちや周りがしなかったから、自分もできなと思ひ込んでいただけで。先進的な大学がなぜ強いかというと、先輩たちが脈々とそういうことをやってきたからだと思います。アメリカ行くの当たり前、IPAに応募するの当たり前、企業の人と共同研究するの当たり前、ビジネスモデルのコンテストで賞金取ってくるの当たり前という環境ですと、後から来た学生も当たり前みたいな気になって、それのできるんですね。同志社にこれまで欠けているのは、まさにその当たり前の雰囲気になかったことだと思います。そのため伸びない。伸びないと次の学年も伸びない、ずっと伸びない。だから、一度モデルを作ってやれば同志社の学生はいくらでも伸びるという気がしています。

学問の持つパワーを 学生に伝える

司会●参加型、体験型教育の重要性について、いろいろな角度からお話しいたしましたが、大学をふり返ってみますと、その認識が広く教員の隅々にまで理解されているとは言い難いのが現状だと思うんです。そこで具体的な課題やサポート、その効果など、今後さらに発展させていくためには何が必要でしょうか。

三木●それは、つまるところ「学問とは何ぞや」ということはいきつくとはいえず。基本的に昔は、学問はどちらかというとトップダウン。まず偉い人の書いた物があって、原理原則さえ勉強しておけば、あとは体系的に学べるというものでした。でも今の学生にしてみれば、現にそうやっていても、うまくいかない会社もあれば、偉い人がどんどん捕まったり悪いことをしたりで、要するに学問をやったから給料が高くなったとか、生活が安定するということでもない。

そのあたりについては、私は学問の社会的価値をきちっと提示してこなかった

知識人に大いに責任があると思っっています。そもそも学問というのは、そんな抽象的なものではなく、幾何学にしても天文学にしても、本当に人間が生きていくためには絶対に欠かせないものだったんですね。それが、生活が豊かになると学問が遊離して、何となく抽象的なものになってしまったことに問題がありますね。

司会●学び方ではなく、学問自身のあり方を捉えなおせということですね。

三木●そう、どんな学問にしろ、「学問だから素晴らしい」のではなく、学問はすべて、人間の困難や不幸を解決するために、ものすごいパワーを持っているということを学生に実感させないとだめですね。少なくとも工学や理学は、科学技術の発展、地球の資源の有効活用、人類の幸福という点では、非常に近くから中期・将来にわたるまで、ものすごいスペクトルで問題解決する力を持っています。ところが学生たちにはそれがなかなか分からないから、それじゃ実地にちょっと行ってみなさいと言ってあげる。そうすると、みんなが本当に苦労している問題について、自分の浅はかな知識でも

結構喜ばれるというのが分かると、もっと勉強しようかなと思うようになる。さらに高度なことを言われると、もっと勉強しようということで、工学教育に関してはかなりフィードバックがかかってくるような気がします。工学部はもともと実学中心だから、特にそうなるんじゃないけれど。

司会 ●他学部ではいかがですか。

田中 ●私はそういう活動に携わる中で、あ、これはまずいなと思って指導していることがあるんです。その一つが、産学連携の風潮の中で社会に媚びてはいけないということ。積極的にアクションを起こすのはいいけれど大学は教育の場ですから、基本的な思想を持つべきなんです。すべてがそうではありませんが、いわゆる典型的な活動家の学生にはアウトプットだけが先行して、それで蓄積がないのが多いのです。学問は、知識が体系化されて初めて学問になり、体系の背景に思想がないといけない。私たちは学問を教えているのですから。その基本的な教育をもっと大学で吸収してから社会に出なさいといけないわけで、私たちもその中

(カス)がある」と。KはKnowledge、AはAttitude、SはSkillですね。たとえば「こういう理論があります」というのがKnowledge、「パソコンでやったら、こうなつて決算処理はこうです」はSkill。ところが大学ではKとSはずつと教えてきたけれど、現実の問題とどう向き合うかというAttitudeは全然教えてこなかった。その点をインターシップでは考えさせたいというわけです。別の言い方をすると、演繹的な教育方法から帰納法的な教育方法を強めたいということですね。「問題」について「仮説」を立てて、検証させ、潰して線を引き直す。こういうプロセスとしてインターシップを考えている。そういう教育改革でありたいという思いを込めています。

カリキュラム改革と風土の醸成

司会 ●今後どんな点を発展させていけばよいでしょうか。

岡本 ●今のインターシップに必要なのは、やや長期のプロジェクトや実習だと思います。たとえば商学部で生産管理をやっているとすれば、生産管理で学んだ

で産学連携を、もっと根っこから考えたいと思います。

それには教育をする者は、学生が社会に目を向け行動するように努力するべきで、もっと自らが行動することが必要でしょう。アメリカの大学では教育が8で、研究が2というスタンスです。私たちも学生との対話機会をもっと増やす必要があると思います。たとえばオフィスアワーを設ける、教員が卒業生の会などに出て行くなど、それが大学内における常識となるような雰囲気を作る。回り道かもしれないませんが、大学教育の王道だと思います。

山上 ●社会科学の特徴は、時間と場所によって結果が異なるという点です。だから歴史と理論を勉強し、どうあるべきかという政策を考えるわけです。しかし現代社会では、そういう検証をしても役立つような理論というのは果たしているのかどうか、というようなことも問われているんですね。そういう意味ではやはり、全部が実学指向になる必要もないでしょうけれど、社会科学の場合でも実学指向重視という考え方は重要になって

理論と、現実の生産プロセスとのギャップを学生なりに問題発見して、それを検証しながら解決していく。こういう実地教育、インターシップをやりたいですね。たとえば大学の年限を4年半や5年制に延長する。ただしインターシップに行っている間は授業料を取らない。あるいは1年に半年間のインターシップを組み込み、インターシップに行っている3カ月間は大学の授業にまったく来なくてもいい。それでも卒業できるような仕組みを作るとかですね。それをインターシップと呼ぶかどうかは別にして、体験的学習というのを一つの重要なコアとして正課の中に位置づけるとしたら、それはおそらく今の大学の学年暦も含めて大きく検討せざるを得ない。そのためには大学もかなり改革が必要です。そこまで進んでほしいという思いを持っています。

司会 ●いわば導入教育としてのインターシップという意味に加えて、専門教育や演習で卒業論文を書くことも関わらせていきたいということでしょうか。

岡本 ●両方ですね。体験的なインター

きているんじゃないかなと思います。

問題を発見する力をつける

岡本 ●私も三木先生のおっしゃることに同感です。特に学問のもっている問題解決パワーについては私も共感するところが多いですね。しかしそれ以前に学生のことを考えると、特に商学部や経済学部の学生をみていて、最近とみに落ちていくのは、「問題」を解決する力ではなく、「問題」を発見する力なんです。ゼミで論文を書きなさい、テーマは自由でいいよと言われたら途端にもうできないんです。自分で「問題」をたてられないから。

山上 ●自由が不自由になる。

岡本 ●そうですね。この点こそ、いま現場にいる教員が学生との間で直面している非常に困難な大きな課題です。「問題」を発見させていくプロセスがすごく重要になってきていると思います。

この課題について解答がいま用意できているわけじゃないんですが、インターシップについては、私たちはこういう言い方をしています。「学問にはKASシップと、カリキュラムと完全にリンクしたインターシップという二つの形があり得るわけです。そして体験型学習もかなり導入的な要素と、たとえば2年後ぐらいにその導入的要素で問題関心をか



出席者の5人 (左から山田、岡本、三木、田中、山上の各氏)

き立てて勉強した子が、今度は現実問題に本気で直面するという体験学習と、いくつかのステップがあると思います。そういういくつかのステップがうまくそれぞれ連動するような仕組みを、教育のプログラムとして考えられればいいなと考えています。

山上●私もそういうことを思っていました。

田中●学生が社会に対して、しっかりとした価値判断ができる思考の軸を持つことを促す風土を作ることが必要です。たとえば、私が教えている経営についても自然科学と異なり、正しい解答は一つではなく、それぞれ経営者による正答があるのです。だから若いコンサルタントが「こうでなきゃいけない」と言うのは、とんでもない話なんです。同様に、学生が社会に出た時の価値判断は経営と同様に多様であって、バラバラでいい。しかし、自分の判断体系を持つことが望ましいのです。そういう教育風土をつくるていかなきゃいけないと思います。そのため皆さんのおっしゃるようなことを進めていかなきゃいけないんです。

らず学内が非常に生き生きしているのは、やっぱり大学の中に社会があるからだと思います。大学の中に放送局があって、スタジオもあって、学生が運営している、地域へも配信している。新聞社があつて非常に質の高い新聞を学内で作り、近隣にも出している。そういうふうで、大学の中には本来社会の一部が存在するべきだと思います。それだけの専門知識を持った人たちがいるんだったら、たとえば同志社でも、シンクタンクやリサーチ会社、あるいは設計や分析・解析を行う会社を作つて京都府下の市町村や企業からの業務を引き受けたら。そうあつて当然だと。そんなふうにもっと新しい試み、実社会の企業ではできない試み、実験的なことや先進的なことを取り入れてみてはどうでしょう。

これはちょっと宣伝になりますが、私は今年4月に同志社大学リエゾンオフィスのインキュベーションルームを借りまして、株式会社インテリジェント・ソリューションズというのを立ち上げました。それもまさに、大学の中に企業があつてもいいという気持ちからです。学生

ただ私が痛感するのは、じゃあこれを全学あげてやってみようという時に、大学というのはガバナンスが全然きかないですね。どうしても何事につけ全体としての関心が低く、一体として動けない。したがって、少なくとも教育者が参加型で関心を持つというような風土をどうつくるかということ、同志社全体として真剣に考えないといけないと思うんです。ガバナンスが利かないのなら、そういうカルチャーをつくる必要があると思います。

山田●同志社の場合、今まではそういう問題がおそらく個々の先生の業（わざ）によって解決されてきたんだろうと思います。全学を挙げて教育や制度をどう考えるかというシステムづくりは、残念ながら後発かもしれません。今年4月、教育開発センターという組織が立ち上がりました。これは学部を越えて横断的に機能するような、一つのセンターですね。これによって、全学的に教育のシステムや教育のあり方を議論する場ができたと思いますので、是非これを活用していきたいと思えます。教育開発センターでは

も近所でアルバイトするくらいなら、通勤時間ゼロで、しかも高度な知識や技術を使つてできるアルバイトが、学内にあればもっと生き生きするでしょう。だから商学部はぜひ先進的のスーパーマーケットを大学の中に作るとか、文学部は出版社を作るとか、文化研究所を作るとか。**岡本**●スーパーは無理でも、コンビニくらいならできるかな（笑）。**山上**●ぜひ（笑）。

三木●京田辺のJR同志社前駅から上がつてくる坂に学生が出品して喫茶店を作る、本屋を作る、レコード店を作る。で、実験して、本当にそういうビジネスモデルがうまく行くのか、在庫管理がうまく行くのかということをやつてもいいような気がするんです。いくらでも京田辺にはそういう実験スペースがあります。

岡本●あの公園をちょっと使わせてもらつて、ベンチャービジネスを勉強している学生たちに、何らかのベンチャーショップみたいなのを考えさせるとかね。たくさん学生の学生が通るところですから。

三木●ええ、1万数千人とか2万人とかいうのは巨大なマーケットであり、資源

具体的には、いま学生の実態を把握するための学生調査を全学で行おうとしています。かつてと較べて学生が変わつたといつても、実際のデータがないわけですね。今の学生はどんな背景を持っているのか、何に関心があるのか、自己評価やモチベーションは、ということを含めた学生調査を、秋学期の終わりに全学で実施し、データを蓄積していつて同志社ならではの多様なモデルを作りたいと考えています。

司会●それは大いに期待したいですね。
大学の中に社会を持ち込む

三木●私にも一つ提言を述べさせてもらいますとね、それは大学の中に社会を持つてくるということです。医学部に病院があるように、商学部がキャンパスの中でスーパー・マーケットを経営して、その財務管理、在庫管理をする。工学部が工場を持つて新しい機械や電子製品を作る、ソフトハウスを大学に作つて開発するとかね。

ご承知のようにアメリカの大学も多くは田舎にあるわけです。それにもかかわらず。
司会●なんだか最後は刺激的な話しになつてきましたね（笑）。

田中●学生にビジネスモデルを作らせるのと、学生でないし出来ないようなことをたくさん考えますよ。

山上●体験型といつても、社会で学生の気ままさが出るケースもありますので、権利と義務、責任感をきちんと指導することも大切なんじゃないかと思えます。

三木●それとやっぱり、自分たちでできない、レベルの高いことをさせるべきですね。学問へのモチベーションを高めさせるのが目的ですから、何でもやればいというものではないですよ。

田中●学生として自分は何を持つていかということ。社会に向けて行動する前に、自分には何を武器として何ができるかを自覚し、それに挑戦するように常々、学生に言つていこうです。

司会●これからも積極的にそういう取り組みができるようにしていきたいですね。本日はありがとうございました。

（収録2004年7月5日）